

稲妻、雷雨、過酷なまでの寒さ。悪天候下で開かれた秋季大会には、のべ118名の会員、非会員が集まった。非会員の参加が増加している傾向は、女性学への関心の高まりと、会員個人のよびかけという信頼に基くネットワークが着実に広がっていることを示している。女性学の将来は、今後の会員の研究、実践活動の発展にかかっているといえよう。

フェミニズムの原点に立ちもどる

フェミニストとしてのそれぞれの「私」の原体験をふまえて女性学の最大関心事である今後の方向性が語られた秋のシンポジウムは、参加者1人1人に大きな刺激を与えるものだった。全体を総括してその場に居合わせなかった人々に伝えるというにはふさわしくない、「存在の重さ」を共有したひととき—パネリスト自身が、改めて主旨を要約した。

「冠つきフェミニズム」批判

—フェミニズムを阻害する日本の
文化的土壌について—

田嶋陽子

公民館などで話したあと出席者の質問や話をきくうちに、おかしなことに気が付きます。フェミニズムで解放されたがっているひとたちの中に、ある種の知的金縛りで身動きのとれない人たちがいることだ。彼女たちは、企業への就職、パート就労、またお金を稼ぐことそれ自体が、資本主義社会に加担する悪だと思っている。彼女達に届いているフェミニズムは、エコロジカル・フェミニズムやマルクス主義フェミニズムらしきものであり、そこで受け取られているメッセージは資本主義批判と近代批判である。しかし当然とはいえ、近代社会と個人主義の成熟なくしてフェミニズムなどありえないのだ。

このようにフェミニズムの頭の上に、エコロジカル、マルキシズム、反近代主義などという言葉に乗せたフェミニズムを、私は「冠つきフェミニズム」と呼んで、批判している。なぜならそこでは、フェミニズムそれ自体がもつ優れた革命性や社会正義が前面に押し出される代わりに、既存の思想の活性化が目的であったり男性主導に鈍感だったり、しかも主旨は一貫して資本主義批判と近代批判であり、肝心のフェミニズムが二の次にされて

しまうからである。この現象は格別不思議なことでない。男=一流市民、女=二流市民という日常生活での差別構造が、図らずも、日本のフェミニストの理論形成にそのまま反映されたからにすぎない。今の日本でエコロジカル・フェミニズムが実践されれば、実際の例で見ると、「夫が保父になり、妻が家で玄米を炊く」型になりやすい。男女の役割分業はそのままで、女性の伝統的職場が1つ減った勘定になる。エコロジーを生きるのはいい。ただ女性差別が温存されるなら意味がない。

マルキシズム・フェミニズムによれば、資本制と実父長制の相互作用で、女性抑圧はより悪質になるという。しかし本当だろうか。資本制は多くの問題を抱えながら、歴史上これまでになくより多くの女性を経済的に解放してきた。そうでなければ、西欧諸国、なかでも、資本主義国でありながら女性解放も社会福祉も世界の最先端を行くスウェーデンをどう説明するのか。またソ連や中国の女性がわれわれと同じく二重、三重労働に苦しむ現実をどう解釈するのか。

資本制は人間の本性そのものだと言った。本性なら野放しにすれば弱肉強食になる。フランスの元保健相の左翼の理想を「平等と公平・・・すべての可能性を万人に開く。単純なことなのだ」といった。スウェーデンの政治家は「心は社会主義、足は資本主義」だという。「心」だけで「足」の麻痺した国は、国民の競争力が抑圧され生産性が上がらない。「足」だけの国は公平さや福祉安寧に欠ける。いま「心」と「足」のバランス、その相互乗り入れが世界的潮流であり、それなくして先進国も個人も成り行かなくなっている。ベレストロイカがその例であることはだれが見ても明らかであろう。

身近な男や家族との関係をより民主的なものに変えたり就労努力をするより、資本制や近代化を敵に見たてて責める方が楽だという皮肉な見方もある。しかしもっと悲しいのは、女性同志が敵対関係を作り易くなることで

ある。その例が、リブの頃の論文「キャリア・ウーマンを撃つ」であり、数年前の「企業総撤退論」であり、また1、2年前の埼玉国立婦人教育会館の夏期女性学講座の講演の「第三世界の女性を搾取しないために、女と子供がかつかつ食っていきただけ稼げればいい」という発言になる。大企業で働かなければ、貧乏であれば、それがそのまま第三世界の女性たちの抑圧に加担しないですむと、本気でそう考えているのだろうか。スーザン・ジョージは「なぜ世界の半分が飢えるのか」のなかで、先進国には「手だしはやめなさい」、第三世界には「いかに道が険しかろうと、欧米への依存度を減らすこと」、また飢餓解消に善意で個人的努力をする「ハンバーガーをひとつ減らす派」には「大牧畜業者の独占的地位を強化するだけ」だと忠告してる。

近代批判のフェミニストたちは、近代が女性の抑圧を強化したという。確かに家庭への囲い込みや役割分業強化による抑圧は否定できない。しかし祖母や母たちの休む間もない不払い重労働を考えたとき、いま主婦たちが抑圧を抑圧と意識できることは、家事労働の近代化と貧困からの脱出による余裕のせいである。残念ながら、貧窮し近代化の遅れている国々での女性解放はむずかしい。貧しければ貧しいほど、一家の、また一国の経済は女性の自己犠牲と不払い労働で成り立っているからだ。いまやっと日本の主婦は20年前のアメリカの主婦たちの状況に追いつき始めている。アメリカの女性解放の発端となったベティー・フリーダンの「フェミニン・ミステイク」は、郊外のゆとりある主婦の不満の分析から始まった。日本はこれからである。

日本女性の解放度を世界34位ときめたアメリカの「人口危機委員会」は、その調査のなかで、アフリカの飢餓で女性と子供の死亡率が多いのは、成人男子に食物を奪われるからだと報告している。また秋期大会の田中由布子さんの発表で、第三世界の女性たちが経済的に自立しなくても、収入はみんな父親や兄に持ち去られると言う。日本の新聞を開けば、毎日のように夫や愛人や通りがかりの男たちが女を殺し、レイプする。雑誌やマスメディアでは性的愛玩物にされ、一方で家内奴隷のままかごの鳥にされている。男性による女性の構造的支配、私物化、隷属化、この男権支配の根絶、父権制の撤廃こそ、フェミニズムの真髄なのである。

男性優位社会の欺瞞と暴力から全人類の半分以上を解放し、限りない自由と平等を達成するために、女性は自信を持って社会のあらゆる分野に進出し、発言し、指導性を発揮すべきである。男と女が五分五分で平等に同じスタートラインに立ったとき、そのときはじめてこれまでとは違った、すばらしい未来像が構想されるにちがいない。フェミニズムは、その思想をより深く明快にする必要はある。しかし既成の思想に寄り掛かる必要はない。ただ、「フェミニズム」だけで十分である。屈辱を原点とし勇気がその滋養である。

原点と現実の間 國信潤子

2年程にわたって日本女性学会は「日本の文化的土壌」というテーマ/サブ・テーマをかかげてフェミニズムを探求してきた。年月の経たわりに探求の成果のないことが問題とされ、今回のシンポジウムのテーマとなった。個人の実感として、また私的体験としてフェミニズムに至った過程を、現実を語ることから明らかにしたいと考えたためであったように思われる。「Private is Political」というように各自の立つ日常性の中にフェミニズムとの出遇いがある。

私の受験教育にあった擬似男女平等主義の中で夢見ていた平等は社会一般には全く通用しないということに出産・子育て、主婦専業という生活の中で気づいたところにフェミニズムとのめぐりあいがあった。そして独学の中で女性史を読み、女性社会学理論を学んだ。日本女性学研究会の組織化と共に私の女性学はライフ・ワークとなっていった。今から10年程前のことである。女性が産む性であるが故に経済自立を失なうということの意味を私は文字通り、子連れ求職活動の中で体験し、「ご主人の収入で何も困らないのになぜそこまでして働くのか？」という周囲からの声に1人苦々しい思いをしていた日々を今思い出す。幸せな家庭のイメージそのものの家族生活の背後にある妻・母たちの自己喪失が私のフェミニズムの出発点であったのだ。

しかし今回この私的体験としてのフェミニズムを他の2人のパネリストと共に語ってみて、私のフェミニズムの出発点はフェミニズムの原点とは程遠く、単にその一部分の記述でしかないことに気づいた。主婦的状况からの脱出というのは戦後ベビーブーム世代の私達にとってはかなり多くの女たちの体験として共有できる感覚ではある。しかし、偶々も関心のもてる女性学での教職を中年からの再就労で得た私であるが、10年前に耐え難い喪失感の中にいたときと何かが変わったのかと問いなおしたとき、極めて絶望的な答があるのみである。つまり、私個人の様子は変わったが社会的状況は何も変化していないのである。経済自立を果たすことはフェミニズムにとって必要条件ではあっても十分条件とは程遠いことに今さら気づいたのである。私的現実の1部変更が、むしろ私の中にあった10年前の「のどのヒリヒリするような喪失感」を失なわせたと同時に心の中のフェミニズムへの欲求を去勢してしまった。

社会構造としてあるセクシズム（性差別主義）との闘いの力は私の場合、個の不完全ながらの「自立」故に方向性を失った。「女のことばかり考えていると全体を見られない」、「被害者意識ばかりでは何も変えられない」ということは熱いセクシズムへの怒りを鎮めていった。

冠フェミニズムとは、フェミニズムということばの前にリベラル社会主義、マルクス主義、エコロジカル等々の語をつけることにより、構造としてある性差別主義を理論的に説明しようとするものである。これらは各自の置かれた立場を、資本主義、家父長制、エコロジー等の

視点から明らかにしてくれる。しかしこれらの理論的説明も、功罪両面がある。功は個の全体での相対的位置づけをするのに役立つ点である。しかし、罪としては、先に述べた、闘いの情熱の削ぎ落としという機能もある。さらに、マルクス主義フェミニズムがそうであるように女性の市場労働進出と、家事労働の社会化をもう1つの新たな規範として呈示してくれる、つまりかつて女にとって良妻賢母主義がそうであったように、生きてゆく指針となるが自己の見なおしはしなくてもよいという横すべり現象が再び生じてしまうのである。

この構造としてあるセクシズムの説明によって明らかにされた社会変革の方向と、個の日常性の中の些細な男たちとの性別分業を軸にした神経戦の連続との間を結ぶ線、それが原点であるはずの女の解放と、現実の間にある距離である。子育ての中で見えてきた性別分業の不合理性は、私には見えても、夫には全く見えていない。言葉を極めて論じてみても通じない歯がゆさ、これはいったい何なのかを自問している。そこに大構造としてある、経済第一主義社会の中で、依然としつ第二の性である女たち、そして力は究極の組織化である核兵器の存在、そしてさらには、その原型であるところのファロクラシー(男根崇拜)の女の意識への内面化がある。これらのために、女たちには、フェミニズムの闘いがむなしの繰り返しの通奏低音のようにきこえているのではないかという気がしている。

3人のパネリスト各々の語るフェミニズムの出発点がかくも三人三様であったことは、フェミニズムの原点の探求の困難さと共に、“Private is political”という言葉程に日常性と政治としてのフェミニズムは容易には直結できないことを改めて教えてくれた。

メモリー・パワー これからのフェミニズム 船橋邦子

(1)女性学研究(フェミニズム研究)にとって“私”を語ることの意味

女性学—女性による、女性のための、女性を対象とした研究。あるいは性差別を基軸とした女性の人権運動。1980年「国連婦人の10年」の中間年コペンハーゲンで開催された世界婦人会議では女性学はこのように定義されていた。従来の歴史(history)は父なる神の物語、his storyであり、そこには女性の経験は無視されているか、あるいは男たちの眼からみた歪曲されたものであること。抑圧、差別されてきた女たちの視点から欠如してきたものを描き出すため her story の創造が呼びかけられた。しかし8年たった現在女性学研究のこの定義は過去のものとなりつつある。

女性学研究は単に「女性を対象」とした研究でないことは周知の事実であり、フェミニズムは世界認識の方法論の1つであることは明白である。

ここでは研究主体の認識方法、日常における性差別への怒りを原点とした研究者の主体制こそが問われると同時に、研究する主体と客体の関係、構造が問題とされる。

1988年モンリオールで開催された第3回国際フェミニストブックフェアに報告者として私は参加した、そこでは her story に代わりメモリーという言葉が会議の中心テーマとなっていた。

メモリー、自らの体内に宿る記憶、内なる声に目覚め、自ら経験を語る過程で自分自身の変革を試みることで、自ら変ることによる自らの解放。

her story には男性中心の学問体系の中心である客観性から脱していないものがある。

ひとり、ひとり女が、生活者、生活人として、男性支配社会で生きてきたその経験を単に愚痴としてはでなく、社会状況の中で捉え直すことで個人の経験の共有集積をし、そこから女たちの手による新しい知の体系をつくりだしていくこと。

またこの傾向は昨年10月ニューヨークで開催された「世界的な女性の性の売買」(この会議はニューヨークのポルノに反対する女たちの会が主催、キャザリン、バリー、ドゥーキン、アッノン、ディリー、カペラー、日本からは松井やよりさん、三井マリ子さん、RCPCのリサ・ゴーと私の4人が出席、わずか4日間会議のみの滞在だったが収護は大きかった)でも明らかにみることができた。

ここでは男性による暴力から生き残った女たち(彼女たちは自らを Survivor と呼んでいた)が彼女たちの経験を語り、聴き手である女たちの尊く、しかも説得力ある事実として共有された。

男のつくり出した知の枠組の中で、男のつくり出した言葉で語る女性学とは異質の女性学、知の体系をつくり出す動きがそこでは確実にすすみつつあることを私は感じた。

今回の女性学会秋季大会で“私を語ること”から始めたいと提案したのは以上のような動機からだった。

しかし男支配の中で、その価値観を身につけて育った自分自身を分析し、人前で語ることは容易なことではない。どこかでいい格好したいという気持と、恥部をさらけ出したくないという意識が働く。しかし私はそれをやってみたいし、これからも常に続けたい。さなぎが何回も脱皮を繰り返しながら成長していくように。

(2)結婚しているフェミニストとして

私には夫と3人の子供がいる。4人姉妹の末っ子だったことや、身体が不自由だったせいか両親共私には勉強して自立した女になることを期待していたようだ。だから大学卒業と同時に、大学院学生の手で結婚する(宣言する前に一緒に暮らしていた)といった時両親は少なからず驚きと落胆を見せた。(反面、人並みに男がいることを安心したようだったが)。末っ子として周囲の親類縁者から可愛がられて育った私は1人であることより、にぎやかな事が好き、淋しいことが嫌いでいつも人恋しい性格になっていた。男である現在の夫の前に大学の寮にいた同級生の女性を好きになり恋人らしい関係だったこともある。今考えてみると彼女と夫は私が愛したくなるような共通した長所をもっていたように思う。性別が

異なるけれども二人はよく似ている。しかし結婚したのは男だった。何故男でなければならなかったのか、本当に私には男（とりわけ男根）が必要なのか、この点については今後の私のセクシュアリティ論を形成するために今後もこだわり深めていきたいと思う。

(3) これからのフェミニズム

多様性を認める中でフェミニストとしてお互いにほめ合い、激励すること。そうして初めてパワーが生まれてくると思う。

私は女性学研究にとって自己認識を深め、メモリーを各自掘り下げつつ、相互のネットワークキングをつくり出していくことの重要性和共同研究によるフィールドワークの必要性を痛感している。

女性学研究は総論から各論を必要とする時期に入ったと私は考えている。今後日本女性学会の中で研究会をつくり、会員相互の協力体制による共同研究を是非私も主体的に参加する中でつくり出していきたい。

会員研究分科会

セクシュアリティ

河野貴代美

「セクシュアリティ」の分科会は、研究報告者である私の私事情による時間のなさから十分まとまった発表にならない、という弁解で始まり、討論も不燃焼に終始したのが残念であった。

大雑把ながら言えば私の提起しているテーマは、セクシュアリティにおける空想、幻想とその働きである。フェミニズムは性の解放をかけた、これまで女であるがために抑圧され、自らも抑圧してきたセクシュアリティの呪縛を解き放そうと主張した。主張の彼方に確かに「解放された女」のイメージらしきものがあつた。私たちフェミニストはそれを夢みた。しかし今、このイメージはどうなってしまったのだろうか。抑圧や差別の型は画一的だが、自由や解放の型は言うまでもなく、尋常一様ではない。その様々なパターンを、明確な意識や行為レベルではなく、もう少し深い広い領域で探り、セクシュアリティの別の側面を明らかにしようとするものである。もう少し言えば、実はセクシュアリティの行為や意志に関わりつつその背後に隠れて表面にでていない空想、幻想は確実に人を支配しているのだ。私たちはそれに気付かないか、あるいは気付かないフリをしてきた。その領域にひそむエネルギーをみるのを怖れてきたのかもしれない。心的現実、時として身体的現実より生々しく切実でもある。

このような視点で60名近い女性のインタビューをもとに性関係のイメージ、関係における幻想、空想を分析しようとしている。更に、いわゆる性偏奇も、空想、幻想をキーワードに読み解くつもりである。性の解放というスローガンによって私達女性は何を得たのか、何がみえて、また何が見えていないのかを勇気を持って直視するしかない。「こうであってほしい、こうあるべき」はとりあ

えず置いて。こと性的存在のありように関する限り、「こうあるべき存在」などはなくて「こうある存在」でしかない、というのが私の主張でもある。（研究発表をこえた表現になっているのは、いずれ上梓するつもり）

分科会参加者の反応は、いくつか寄せられたが、視覚を問題にする際の疑問が出た。これはこれは現在のマスメディアの構造を反映しているにすぎないのではないかと。男のほうが女より視覚的でポルノなどを見てもちっともおもしろくない。という感想などもあつた。

これに関連して、感覚にヒエラルキーがあるのではないか、視覚は上等、臭覚、触覚などは下等で女に属するなどと。私を取り上げているのに体の疎外の問題がある。性幻想を性関係にとりこんでいるのは女より男のほうで、それだけ体の疎外が深いのではないかと考えている。これに対して女の体も深く疎外されている。モノ化された体に対抗する言葉がない、などという意見も出された。性に対する想いは曖昧にして複雑、その分、観念操作もされやすい。だとすれば『エジプトの死者の書』のごとく、「あゝ願わくば、わが影を監禁するなかれ」

女性と開発

田中由布子

女性が今日、自立について考えていく場合、次の4種が考えられる。賃労働によるもの、創業によるもの、国連や政府などによる開発、民間団体による開発である。この中で、今日積極的に行なわれているのは、創業によるものと民間団体による開発であり、前者には、飲食店、本屋、リサイクル・ショップ、染物の店などがあり、後者には、シャプラニール、第3世界ショップ、アジア民間交流グループ、滞日アジア女性の問題を考える会などがある。

女性の自立の創業によるものについては、すでに述べているので、「女性の労働と創業と」（婦人労働研究会会報）No13 1988）ここでは、民間団体による開発の中に、女性の自立の方向を見てみたい。シャプラニールはバングラデシュで、第三世界ショップはアジア、アフリカ諸国中心に、アジア民間交流グループはインドネシアで、滞日アジア女性の問題を考える会はフィリピンで、それぞれ主たる活動を行っている。前三者についてはことに、女性問題を意識しているわけではないが、事実上、南の貧困の問題の深刻なものは、女性に多く、それを自立させるために、それぞれに試みがなされている。滞日アジア女性の問題を考える会は、前三者ほどのものではなく、手作りカードの販売を行っている程度である。

シャプラニールの場合は、「未就学児童教育活動」「手押しポンプの設置」「被災地後復興協力」「成人識字教育活動」「養魚の普及活動」とともに、手工芸品を輸入、販売している。これによって女性が正当な賃金を収入を増やす機会としている、第三世界ショップの場合は、ジュートワークスでカゴを作り、THEAという基金で縫製の指導、ミシンの提供、高品質のネグリジェ、子供服、リボンの生産を行ない、女性に充分な給料が支払わ

れるようにしている。仲買人の利益の仲介なしに適正な価格で、これらの製品を買い、抑圧と搾取を取り除き、貧困からの向上を目標とする活動を展開している。アジア民間交流グループの場合は、YABAKA（仕事財団）の活動を資金的にサポートし、インドネシア世界を学ぼうとするものである。YABAKAの lowhousing 政策を援助するとともに、荒地に果樹を植え、家畜を育て、養魚を行い、小産業の育成など行っている。また、日本の町工場の技術の紹介を、ジャワの人々にしている。

女性の自立を企画するこれら活動と日本国内の女性の創業の動きの中に、自立の質において、世界史的解放の第一歩を読みたい。これらは、賃労働という雇用労働の立場を離れて、自ら、仕事と収入を作り出し、したがってまた、女性向きの経済システムの創造でもあるからだ。

「女性芸術家の歴史」 その1

深沢純子

(当日はスライド映写を中心にしたので、報告の部分を補います。)

日本のフェミニスト研究の分野で、欧米と大きく異なることは、フェミニストアート研究が少ないことである。特に女性芸術家の歴史を発掘する作業の功績は、隠された女性芸術家の再評価をした。その頂点でもあり、その後の研究の発展を促したのは、1976年にロサンゼルスで行なわれたヨーロッパ、アメリカの女性芸術家の作品をルネッサンス以来、400年間にわたり集めた展覧会であった。その後の15年間でそれ以上に、芸術や文化のありかた、構造そのものに批判の目が向けられ、それは新しい批評、表現をも提出に結びついている。もちろん欧米の研究軌跡を追従するだけにとどまらず、現在の日本の文化状況を追って、検討するための素地とならなければ意味はないことは承知している。日本の近代美術はヨーロッパの印象派以降の影響を受けて隆盛し、とくに啓蒙的、教育的影響はいまだに顕著である。その際立って特徴的なことからは、洋画（主に油絵）といわれるジャンルでの技術的、正統的アカデミズムの歴史を育ててこなかったことと、それにもかかわらず近代の天才崇拜の傾向、ボヘミアン的芸術家のイメージ（いわずもがな、これが現実の生身の芸術家の姿とは大きくかけはなれている）が広し流布してしまっていることである。そのような状況では、芸術家のイメージが、「女性」の創造者と重ね合わされることはまれである（日本の状況についてはいずれ改めて問題提起をしたい）。

今回の報告は、西洋美術のなかでルネッサンスから19世紀なかばの印象派出現以前までをひとくぎりとして、約40人の女性アーティストの作品を並べてみた。個別の作家の分析よりも、なるべく多数の作家の作品を観てほしかったのは、ひとつの作品の背後に、その作者がいるわけだが、それは女性／男性のふたつの可能性が等しく、そして確実にあることを訴えたかったからである。なぜなら、専門的研究での言説でも、通俗的な言説でも芸術家の代名詞はほとんどの場合、「he」である。いうまで

もなく、相対的に女性芸術家は男性芸術家にくらで少数派には違いないがだからといって、「ゼロ」ではない。

そのような言説のなかに「女性芸術の囲いこみ」という方法がある。これは正統的な芸術に女性をはいりこませず、周辺的、また特殊なものという評価を下して、排除する方法であるが、今回のように彼女たちの作品を通覧するとき、その「囲いこみ」の不当さが明らかになる。高度な技術を有し国際的にも高い評価をうけたもの（ラビニア・フォンタナ、カテリナ・ファン・ヘメッセン、マリア・ファン・オイスターヴァイク、ロザルバ・カリエア、ローザ・ボヌールほか）、女性には近寄りえなかった男性ヌードの習作の機会を得て歴史画や公的な大作を制作したもの（ソフォニスバ・アンギソラ、アンジェリカ・カウフスマンほか）、また生涯独身で制作を続けたものも結婚、育児で制作の続行が困難になったもの、10人の子供を産んでなお生涯に数百点の作品を制作したもの、「男性的」といわれる主題を得意としたものなど、ひとりひとりが、作風も、生き方も違うことを認めることができる。それらの作品を「女性という属性」でくくるとの無理と、差別とを改めて認識し、そのような「囲い込み」や「無視」が、いつ、どのようにして広がっていったかも、研究の今後の課題としたい。

秋季大会の反省と新しいときめき

- 出席者数 118名（会員36名 非会員60名）
11月26日 第1日目 会員36名 非会員15名
11月27日 第2日目 会員36名 非会員45名
- 参加した動機
大阪女子大学女性学講座関係者 23名
新聞をみて 14名（集計：田川）
- 総会及び学会の活動、運営についての話し合いを中止したことについてのお詫び
当日の進行上の都合から時間切れとなったこと、長時間の議論で疲労していたことを理由に、総会を開会せずに幹事間だけの合意で予定を変更したことを幹事一同深くお詫びします。
とりわけ参加するつもりで残っておられた会員及び非会員の方々に対して、一旦開会して了承したうえで散会すべきだったと反省しております。
- 大会の状況をみながら、臨機応変に対応するため、進行係を置く。
- 開始時間を守る。
- 個人研究報告は、単に研究報告だけでなく、ワークショップなどもいれていく。
- 大会のパブリシティをする時、会場により、保育態勢についても触れる。

今回、大阪女子大学での大会は幹事の田川さんを始め、学生、卒業生の数人のかたがたに全面的にお世話になりました。しかし女性学に関心を持って下さって手伝って

くださりながら、仕事に追われてゆっくりと話し合いに参加したりすることができないのが、残念でした。このへん会場や、進行の具合で解決できないものか、今後の課題でしょう。

そのほか大会運営などに関するご意見をお寄せください。ありがとうございました。

学会誌の創刊にむけて

日本女性学会は1989年度の創立10周年に、念願の学会誌を発刊するべく計画してきた。先日、幹事会で、その具体化へむけての大枠が決定した。

(1)編集委員の公募

募集人員 5～10人
推薦方法 自薦、他薦にて
公募締め切り 2月28日 事務局あて郵送のこと

(2)学会誌の正式名称の公募について

締め切り 2月28日 事務局に郵送のこと

(3)編集委員会の発足

公募によって決定した編集委員の初めての会合は次回幹事会と同じ日程で行う

第一回編集会議 3月12日 日曜日
11:00～14:00

場所 東京都婦人情報センター

その場で幹事会との話し合い、編集長の選出ののち、活動を開始する。

(4)投稿規定について

正式な投稿規定は編集委員会で検討し決定されるが、概略は次のとおりである。

論文 400字詰原稿用紙の場合 40枚以内
研究ノート 20枚以内
評論 5枚以内
情報コーナー

投稿された論文については適当と思われるコメントーターにより、検討を行なう。

エントリーは4月末、第一稿の締め切りは9月末、最終稿は11月上旬の予定。

(5)その他

- 論文掲載者の雑誌買い取りなどについての条件がつくことも考えられる。
- 一般書店での販売ルートを確保するために、発売元となる出版社をさがす。

幹事会だより

○11月26日 21:30～22:40

場所 ホテル・サンルート堺 1Fロビー
出席者 加藤 亀山 河野 桑原 田川 田嶋
館 内藤 中安 深沢 船橋
幹事11名他オブザーバー2名

- 議題 ①報告 東京都婦人情報センターの登録団体となったこと
②89年度年次大会について 別ページ
③学会誌発刊の件 詳細あり

○1月8日 11:00～17:00

場所 東京都婦人情報センター
出席者 加藤 亀山 河野 国住 桑原 田川
田嶋 内藤 深沢 船橋 計10名

- 議題 ①秋季大会の反省
②学会誌
③年次大会のテーマ等 現在も討議中
④自主女性学講座について

1989年度夏期自主女性講座（於国立婦人教育会館）に日本女性学会は共催団体として参加、協力することを決定した。

（詳細、インフォメーション参照）

○1月21日 臨時幹事会

場所 法政大学80年館 6F
出席者 加藤 亀山 桑原 田川 田嶋 内藤
船橋（委任 北川 館 河野 深沢）

- 議題 ○ニューズレター発行の経費の問題
原則として予算内で実行する努力
○幹事会の運営及び幹事の任務内容と裁量の範囲について

次回幹事会のお知らせ

3月12日

場所 東京都婦人情報センター
スケジュール
11時 学会誌編集会議
2時 幹事会

幹事会は公開です

出られない方は批判も含めて積極的に御意見を文書でお寄せ下さい。

1989年度 年次大会について

1989年は、日本女性学会創立10周年になります。記念イベントなども盛り込む予定の年次大会の、日程、場所は、次のとおり決定致しました。

日程 1989年6月10日（土）
6月11日（日）

場所 法政大学

テーマや、イベントについてのご意見をお寄せ下さい。
6月10日夜は、私学会館にて記念パーティー開催の予定です。（かくし芸、パフォーマンスなど、歓迎）

会員の異動 '88 10/18~'89 1/17

《新入会員》

《住所変更》

《住所不明》

寄贈資料 (『』は書籍)

『アカデミックウーマン』—女性学者の社会学—
加野 芳正 東信堂
昭和63年度高等教育機関における
女性学関連講座開設状況調査結果報告
国立婦人教育会館
国立婦人教育会館ニュース 第43号 国立婦人教育会館
国立婦人教育会館(リーフレット) 国立婦人教育会館
婦人情報センターだより No. 34、35
東京都婦人情報センター
VOICE OF WOMEN No. 94、95、97
日本女性学研究会
国際女性学会 '88.11月号、'89.1月号 国際女性学会
月刊婦人展望 '88.9号、10号、11.12号、'89.1月号
市川房枝記念会出版部
婦人情報 No. 25 新宿区立婦人情報センター
あなたとわたしの性 6号 性を語る会
ハンディキャップトイレガイド千葉県 小野清美(会員)
全国婦人新聞 第876、877、878、879、880、881、882、
883、884、885号 全国婦人新聞社
女の手帳J.Oダイアリー '89 ミス、データバンク

Information

講演会のお知らせ

(1)テーマ Women and work in Asia (アジアにおける女性と労働)。
講師 Noeleen Heyzer (ノーリンヘイザー氏)
アジア太平洋資料センター (APDC)
女性プログラム主任。
日時 1989年2月21日(火) 午後2時~5時
場所 お茶の水女子大学附属図書館第2会議室
主催 お茶の水女子大女性文化研究センター研究会

(2)テーマ 「アメリカ女性史の課題と展望」
講師 リンダ・カーバー
アメリカ学会(アメリカ合衆国)会長、
「アイオワ大学教授、「Signs」編集委員
主な著書:「Woman's America: Refocusing the Past; an Anthology」Oxford UP, 1982
*「Women of the Republic: Intellect and Ideology in Revolutionary America」
U. North Carolina Press, 1980
日時 3月22日(水)
13:30~16:00
(16:10~17:00 レセプション)
場所 国立婦人教育会館
主催 国立婦人教育会館
アメリカ学会(日本)
東京大学教養学部アメリカ研究資料センター
問い合わせ 国立婦人教育会館
申し込み 情報交流課

海外情報

(1)1989年度全米女性学会

日時 6月14~18日
テーマ Feminist Transformations
連絡先 Univ of Mary Land College Park
MD 20742-1325

(2) Racism & Other Forms of Oppression

日時 4月6日~9日
場所 アイオワ市
連絡先 Women Against Racism
The Univ of Iowa Women's Resource
and Action Center Iowa city
IA 52242
(tel) 319-335-1486

(3) ニュージーランドアジア研究学会

8月17日～19日

テーマの一つには近代化が女性にどのような犠牲を強いたかなどをとりあげる。

(4) ニュージーランド女性学会

8月26日～28日

場所 クライストチャーチ

発表したい方、参加したい方は下記へ連絡を。

連絡先 % Department of Asian Languages
Canterbury Univ New Zealand
CHIGUSA STEVEN KIMURA

1989年度自主女性学講座実行委員募集

恒例になっている国立婦人教育会館主催の夏季女性学講座は会館10周年記念行事「国際セミナー」開催のため今年は開かれないうちになりました。

そのため有志が中心となり自主女性学講座実行委員会を結成し、8月26、27日に同会館で開催することにいたしました。

日本女性学会の他、国際女性学会、女性学研究会、日本女性学研究会が協力することに決まっています。

実行委員、研究実践報告など、どんどん積極的に参加し、自分たちの手で女性学講座を作りあげていきましょう。

連絡先 日本女性学会事務局

○ 広告ウオッチングプロジェクトより

ハイヒールの足を前後に大きく開いた写真に、「地下鉄は便利」の英文コピーを配したポスターは、「これは女性差別です」のステッカーによる抗議によって、遂に取り下げられることとなった。この経過については、12月7日の日刊スポーツ紙上にも取り上げられているが、ステッカーによるアピールが効を奏し、メディアに登場する女性イメージの差別性に歯止めをかける大きな「一歩」となった。第2弾ステッカー「女をなめるな」できました。無駄にはならない。やってみて下さい。

○ 研究会「女性の性への暴力」への呼びかけ

女性学研究も各論の時代に入り、各々が自前の言説を紡ぎ出すことが求められています。日常的な研究活動を実りあるものとし、相互に発する場として、会員有志による「女性の性への暴力」研究会を始動させたいと思います。性犯罪、性的虐待、性産業、ポルノ、マスメディアでの扱い方など、新たな問題提起と深まりを求めたい、と思います。(呼びけ人 内藤、船橋)

日時 3月9日(木) 5:00～8:00

場所 東京都婦人情報センター15F (飯田橋)

女をなめるな

第2弾 ステッカー
注文受付中!
「これは女性差別です」
も増冊しました。よろしく

編集後記

ニュース担当が関西から東京に移って三号目。印刷費の格差の違いに「物価高世界一」のトウキョウを重さを身をもって感じています。と同時にスケジュールづめの中でどう任務をやりくりするか、楽しく、さわやかに、しなやかにもそう容易ではありません。学会の決められた予算枠ですすめるよう最大限の努力を今後もしていくつもりですが、学会の財源を豊かにしていくためにもニュースレター販売に御協力いただければ嬉しい限りです。(H.K., J.F., K.F.)

